

| | 場 面 | 解 説 |
|---|---|---|
| 1 |  | <ul style="list-style-type: none"> • 沖縄県はかつて「琉球」と呼ばれた独立国で、近隣の中国や朝鮮、東南アジアなどの諸外国や地域との交流を通して独自の歴史・文化を築いていました。 • この物語の中国人たちが漂着したのは、1824年（中国の年号では道光4年）12月6日で、場所は現在の恩納村仲泊でした。 • この漂着事件については、『歴代宝案』という、琉球と諸外国の間の外交文書を書き写した記録の中に記載されています。 • 具体的には、①琉球から中国宛て、漂着者からの聞き取り内容や琉球での様子を報告し、琉球が用意した護送船に乗せて送り届けることを知らせる文書（1825〔道光5〕年3月10日：宝案2-140-11）、②中国から琉球宛て、護送船が無事福建に到着したことを知らせる文書（1826〔道光6〕年5月3日：宝案2-141-15）、③琉球から中国宛て、中国側の報告を受領したことを知らせる文書（1826〔道光6〕年8月13日：宝案2-143-08）等、合計8通からなる琉球と中国との間で交わされた往復文書があります。 |
| 2 |  | <ul style="list-style-type: none"> • 琉球人以外の者が漂着した場合、各地方においては、地元民はその事実を速やかに番所（現在の町村役場に相当する）に届け出、首里王府へ報告する義務を負っていました。 |
| 3 |  | <ul style="list-style-type: none"> • 呂正たちの出身地である「福建省泉州府同安県」は、泉州府の中でも海に面した、古くから造船業と貿易業で知られた町でした。彼らの中には、中国沿岸の港を頻繁に行き来する遠隔地貿易に従事する商人が数多くおり、その結果、海難事故に遭遇する確率も他の省に比べ多くなったのです。 |
| 4 | | <ul style="list-style-type: none"> • 東シナ海を隔てて位置している琉球と中国との間には、数多くの船が行き交っていました。琉球から中国へ派遣された進貢船や、中国から琉球へ派遣された冊封船など国を行き来する船のほか、中国国内沿岸の港を往来する商船や、 |

4



琉球国内の先島から首里へと向かう貢納船など、様々な人やモノが海上を行き交いました。気象予報や航海技術が現代ほど発達していない当時、国内の移動を目的とした航海であっても命がけの旅となりました。

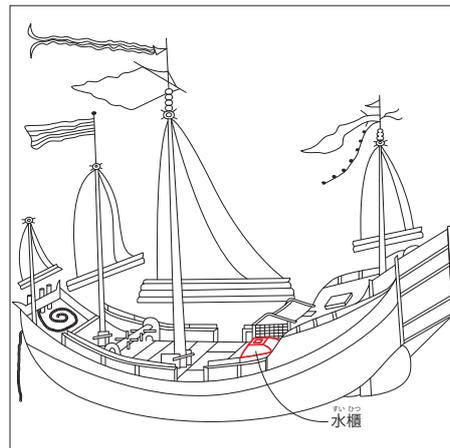
5



- 「漢方薬のにんじん」：原文では、「人參」と書かれており、当時、漢方薬として幅広く使用されていた高麗人參を指すと思われます。

- 六人が乗り込んだ「水櫃」は、船の甲板に設置された飲み水を貯めるための水桶（給水タンクのようなもの）です。恐らく、船から海に放り出された際、「水櫃」を救命ボート代わりに使用したのと思われます。『歴代宝案』にはこのように「水櫃」を救命ボート代わりに使用して命拾いした事例を複数件確認することができます。

[水櫃のイメージ図]



6



- 当時、琉球は中国（清朝）皇帝から冊封を受け（国王を承認・任命してもらうこと）、その庇護の下に置かれていました。1684（康熙 23）年8月、左記の命令が琉球を含むアジアの朝貢国に下されました。

「この度、これまでの民間の海外貿易禁止令を解除したので、中国各省の多くの民間人が船を出し貿易するようになった。そこで、中国周辺の国々の国王に対し、それぞれ沿岸の地方官に命じて、もし中国船が漂着した際には、速やかに保護して帰国させるようにせよ」

今回の漂着事件に対して、琉球側が速やかに対応出来たのは、中国との間にこのようなルールが存在していたことも関係しているのです。

- 当時、中国や朝鮮からの漂着者は、漂着地から那覇の泊村（現在の沖縄県那覇市泊）へ送られました。そこでは、用意さ

6

れた宿泊所（仮小屋）へ収容され、帰国するまでの間、首里王府の管理下におかれ、衣類や食事の提供を受けたり、医者の治療を受けるなどして過ごしました。

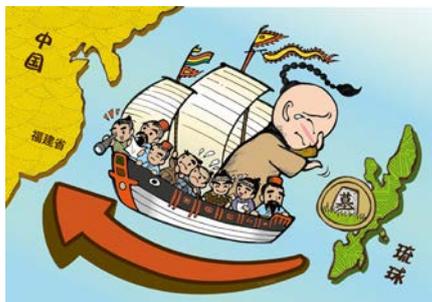
- 「琉球交易港図屏風」(浦添市美術館所蔵)の泊村部分には、漂着者を収容する施設の様子が描かれています。

→ [琉球王国交流史デジタルアーカイブ](#)

交流史デジタル画像庫 参照



7



- 呂正が琉球へ漂着したちょうど同じ時期、別の漂着事件も発生していました。呂正と一日違いの道光4年12月7日、カントン 広東省出身の商人蔡高泰さいこうたいら一行（22名）の船が伊是名島に漂着、うんてん 運天港を経て、泊村まで護送されてきました。彼らの証言内容からも、恐らくこの2隻の船は、同じ暴風の被害に遭ったものと思われます。呂正たち一行の生存者一名のみに対して、蔡高泰らは22名全員が生き残っています。この2隻の明暗を分けたのは一体何だったのでしょうか。授業の際、このようなエピソードにも触れると、児童の興味関心を引きつける効果が期待できます。呂正は蔡高泰ら一行と共に護送船で帰国の途に着きました。

- 墓碑には彼らの出身地、死亡した日付（漂着した日）が刻まれています。その他にも、この墓碑に刻まれている内容には、死亡した人物と呂正との関係を知るための手がかりがあります。というのは、墓碑に刻まれた中央の人物、呂孝の名前の上に「清考」の文字があります。「清」は清国のことですが、その時代、子が父親の墓碑を建てる際、父親の名の上に尊称として「考」や「先考」を加える習慣がありました。つまり、この墓碑から呂孝は呂正の父親であったことが分かるのです。

*墓碑は実際には琉球側が建立したものです。

- 「唐人墓の墓碑」は現在、恩納村指定文化財として、恩納村博物館前の広場の一角に残されています。呂孝たちの墓は、戦後、米軍による道路拡張により壊され、墓碑のみが残り、現在の場所に移設されました。

